

避難時は間接照明に

各市町村も独自性を出して地元の水を売り出す。

甘楽町は日本名水百選、雄川堰（ぜき）の源の稻含山（いなふくみやま）の水をボトルドウォーター「かんらの天水（てんすい）」（500ミリリットル100円）として21年に発売し、道の駅甘楽などで扱う。



備蓄や避難所の明かりとして甘楽町が推奨する「かんらの天水」

19年の台風19号で町民が避難を強いられた際、備蓄してあった2リットルのペットボトルは配布しづらかった。翌年にはコロナ禍に入り、複数人が紙コップに注いで回すという想定に衛生面の懸念が生じたため、官民連携で開発した。

町水道課は「ボトルを下から照らせば避難先で間接照明になる」と家庭向けの備蓄として推奨。その際に優しく光が漏れる包装は高崎商科大と同大短期大学部の学生がデザインした。